

## 十 自己徹底の道

照す光は護る光である。映す鏡は教ふる鏡である。自分の姿を映す鏡は、自分の淺ましさを赤裸々に見せつけると同時に、其に加へられたる如來の恩寵を知らずする教である。此教の鏡の前に私共は詐らず、飾らず有の儘に自己の眞相を見て、自己に徹底せねばならぬ。鏡も影も共に否定する餘裕なく自己の眞相に驚き且つ感泣するのである。

宗教上教の鏡は、化粧の道具とし化粧の度を知らるために用ひてはならぬ。世に老女の化粧ほど慘めなものはないとすれば、凡夫の顔にこてくと佛菩薩の装をこらす修行者の化粧ほど、慘めな氣の毒なものはない。白粉を洗ひ落とした所、紅を拭き取った所、そこにこそ却つて、明瞭に自己本來の面目が現はれ来るでないか。何ぞそんなに強て化粧するには當らぬ、凡夫は凡夫でないでないか、悪性は悪性でよいでないか。その凡夫悪性を見込んでの佛があることを知らないのか。

宗教上の教の鏡は、自己辯護の用に供してはならぬ。世に自惚ほど醜いものはないとすれば、心を深くく觀じて佛性を見やうとし、心を細かくく念じて、本源に觸れやうとする企や、我は佛である菩薩であるなど云ふのは、凡夫として及びもつかぬ自惚ではなからうか。自惚れる者は自己の缺點を知らないからである、辯護する者は自己の缺點を隠さんとするのである。共に眞摯なる求道者とは申されぬ。

思へば、親鸞聖人も初のうちは、いろくど自己を想像し、さまざま修行戒行によつて、新しく自己を造り出さうと、苦心に苦心し努力に努力せられたが、法然上人の教によつて、始めて『觀經』の下々品が自己の姿そのまゝであることを知られ、頓に我が計らひを止めて、その上に輝ける如來の大悲

に、渴仰せられざるを得なかつたのである。「煩惱具足のわれらは、いづれに行にても生死を離るゝことあるべからざるを憐れみたまひて、願をおこしたまへる本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もとも往生の正因なり」。『歎異抄』何たる偉大なる徹底味ではないか。

聖人はこの徹底味を以て、經典の上にも、七祖の上にも、日々起る事件の上にも、日々接する人物の上にも、靜かに自己を味はれたのであります。彼の流罪遠流の上にも、「これなほ師教の恩致なり」と自己の使命を感じ、此世からなる罪人の上にも、もらさぬ彌陀の大慈悲を味ひ給ひ、日野左衛門が門前に一夜を明かしては、下々品の悪機を身に味ひ給ひ、一夜の宿さへ借りかねたる罪業深い親鸞がために、是非とも助けずばおくまいと掛り果てゝ下された五劫思惟の本願が有難いと、お喜びになつたのです。常陸の辨圓が害心の懺悔を聞かれても、阿闍世王の上到自己を見たまひし聖人、別に驚かるゝ様子もなく、之を惡むより寧ろ自分の恐しい心に泣かれたのであり。平太郎の熊野詣でに於ても、いよく本地の誓約をお味ひになつて居たから、別に不思議とも感ぜられなかつたのであつた。

かくて聖人の宗教は、徹頭徹尾、悪性罪業の自己の上に注がれる如來の大悲を仰ぐのである、罪に泣く者に對して共に泣いて下さる佛に抱かれて安住するのであります。經典の鏡によつて發見せられたる聖人の自己は、佛としてでなく、菩薩としてでなく、聲聞緣覺としてでなく、實に二十五有界の衆生、特に唯除と選ばれたる、五逆謗法の惡人としてであつた。「五逆の罪人を嫌ひ、謗法の重き咎を知らせんとなり。この二つの罪の重きことを、知らしめて、十方衆生皆もれず往生すべしと、知らせんとなり」『銘文』これ聖人が大悲の親心に感泣せられた感謝の叫びであります。